

# 日技城インターンシップに参加して

## 参加して

外国語学部  
中国語学科3年

鎌田 百合

### 1 はじめに

卒業して、就職して、結婚して、と自分の将来をリアルに考えたのは、大学生活2年が過ぎた頃でした。中国語を学びたくて入学した神奈川大学中国語学科。授業も充実しているしネイティブの先生もいて語学演習室もある、学ぶ環境は整っていました。しかし大学生って自由で誘惑もたくさん。やりたいことが次から次へと出てきて尽きなくて、忙しさを理由に勉強から逃げている自分がいました。そしていつの間にか「本当にやりたかったこと」を見失っていたのです。

この2年間、まあまあ楽しかったけれど、同じような2年間を経て卒業したところで、私には何が残るのだろうか。そう考えたら、なんだか怖くなりました。このままではきつと何も残らないと思っただけから。

あと半分。このまま大学生活を終えたくはない、社会に出ても通用するスキルを身につけたい。そんな想いを胸に、2011年・夏、中国深セン市にある日技城のインターンシップに参加してきました。

### 2 生活

8月17日、香港の羅湖より深セン入りし、そこからタクシーで日技城のある観ランを目指しました。タクシーには1時間以上乗っていたでしょうか。着いた観ランという場所は、日本では見たことのない殺伐とした風景が広が



日技城周辺の様子 1

り、嗅いだことのない異臭が充満していました。

「正直行く前までは、「なんとかなる」と思っていました。今までなんとかならなかったことはなかったですし、適応力には自信がありました。しかし、鼻を直接刺激する

強烈な臭いと、道路のいたるところに散らばっているゴミを目にした途端、そんな自信は一瞬にしてどこかへ消え失せ、ただただ不安になるばかりでした。そして、これから始まるであろう戦いに挑む決意を固め、中へ入りました。一通り挨拶を済ませると、早速寮へと案内してくださいました。思い返せば寮での生活は「経験したことのない体験」の連続でした。



日技城周辺の様子 2

A314号室。部屋には二段ベッドが6台あるのみで、奥のドアを開けると、洗濯をするスペースと、トイレとシャワーが一緒になった個室がありました。ベッ



A314号室

ドと言っても厚さ2センチ程のベニア板がひいてあるだけの簡素なもので、硬くて痛くて、なかなか寝付けない日々が続きました。また特に辛かったのが、毎晩のシャワーでした。冷たい水で体を洗うのももちろん初めてで戸惑いましたが、トイレを跨いでのシャワーには抵抗を隠しきれませんでした。

歯磨き、洗濯……全ての行動において、日本での「いつもの通り」が通用しません。食事もまたそうで、ワーカーさんたちの生活を知らりたいと思い、彼らが毎日利用している従業員食堂に行きましたが、日本の食生活に慣れていて私たちの口に合う食べものはほとんどありませんでした。口に入れても食道を通っていかないのです。けれども、食



昼食

べなければ元気も力も出ません。このままではいけないと思った私たちは、街に出て食べられるものを探し、なんとか最後まで生活することができました。こんなに「ただ生活する」ということに、必死になるとは思ってもみませんでした。この10日間、まさにサバイバルでした。

私のお世話になった部屋には、ワーカーの李さん(23)、雪さん(20)、古さん(35)の3人が暮らしていました。中国人はどこか冷たいという印象を持っていましたが、彼女たちは明るく迎えてくれました。私の拙い中国語にも耳を傾けてくれた、言葉を補いながらの会話でも楽しんでくれていたと思います。「好きな人は?」「結婚はしたい?」など、あの時の私たちには中国も日本も関係なく、誰もが話すようなガールズトークで盛り上がり、限りある時間を楽しみました。しかし同時に、私と同じ年齢の人たちが親と離れ、学校にも通えず、お世辞にも良いとは言えない環境で生活し働いているところを間近で見て、とてもショックを受けました。そして自分がいかに恵まれた生活をしているのかを実感しました。

「働く」ってなんででしょうか。ベッドが硬いから、お湯が出ないから、ご飯がまずいから。だから、なんだと言うのでしょうか。家族のため、自分のため、生きるために働く。働かなければ、その先

には死しかありません。「働く」ってそういうこと。これから先私は、どのように仕事に向きあうべきなのかを考えさせられました。そして、どんな状況下においても、たくさん笑って元気な彼女たちは、キラキラしていて本当に素敵でした。彼女たちと過ごし、「生きる」意味と意義を知れたと思います。

### 3 インターンシップ活動内容

さて、日技城にはインターンシップをしに行きました。そもそも日技城とは、自分たちだけでは中国進出が難しい日系企業のお手伝いをしている会社、というのが簡単な説明になります。社長は日本人ですが、そこで働く人たちは全員中国人で、今回私たちがお世話になった寮で生活しています。私たちはその日系企業に電話をかけ、アポイントを取り、社長のお話しを伺うのが主な活動内容です。

企業訪問にはH社(配線関係製造)、P社(下着製造)、O社(カメラレンズ・照明器具製造)、T社(精密機器製造)、M社(ステンレス器具製造)の全部で5社、行かせていただきました。情熱を持って、職員、ワーカーと向き合っている方もいれば、彼らに気を遣い、ある程度の方がまますましている方もいて、どこも社長の色が出ていると感じました。そして5社全てに当てはまっていたことは、社長に「行動力」があることだと思いました。あ

る社長が、「成り行きはどうであれ、今在る自分の立場でできる精一杯の『行動』をとれるかどうかで、新しい道を切り開いていけるかが決まるのだ。」と話してくださいました。考えて、動いて、これからの時代、周りと同じことをしていたのでは先には進めないのだと考えさせられました。

#### 4 学んだこと

私の参加した日技城インターシップB日程には、日本全国から計20名が参加しました。関西大学の元気でキャラの濃い子もいれば、アジア制覇を狙わずに抜けた行動力の持ち主もいました。最初はお互い人見知りしましたが、知らない土地で助け合っているうちに自然と距離も縮まり、帰ってから交流を続けるような仲になりました。



初日顔合わせ

神奈川大学からは、阿部美里、坂下志保、私の3人が今回のインターシップに参加しました。2人とも普段から仲の良かった友だちです。でも、私にとって大学の友だちって、部活のように同じ目標に向かって何かに取り組むわけでもなかったのので、「上辺だけ」の関係に近かったように思います。

そんな2人がかけがえのない「仲間」という存

在へと変わったのは、中国での生活のおかげでした。初めての中国、右も左もわからなかったけれど、2人がいてくれたから最後まで、笑顔でいることができました。笑ったり、泣いたり、道に迷ったり、お腹空いたり、疲れたり、時には喧嘩もして。楽しいときも辛いときも、いつも一緒でした。こんなに何もかも、さらけ出せるようになるなんて、と今でも驚いています。

「仲間」。インターシップを通して学んだ一番

大切なことです。



「仲間」



夜の集まり



日技城周辺での主な移動手段



従業員食堂

5 おわりに  
「何があっても、どんなときでも楽しむ」、これが私の信条です。観ラン日技城での生活は、客観的に見れば、辛いことの方が多かったと思います。しかしその中でも、私なりに楽しみながら経験値を積みましたし、日技城で過ごした10日間は、今まで生きた21年間のどの瞬間よりエキサイティングでした。  
3年・後期、いよいよ就職活動が始まります。インターシップに参加しなければ、自分のことを何も知らないまま、適当に始めて適当に終わるところでした。勇気を出して挑戦してよかった、知らない世界に飛び込んでみて良かった、と心から思います。あとは、この経験を活かすだけ。残りの大学生活約1年半、神奈川大学に入ってよかったと思えるような、濃いものにしてみせます。